

Louise Young,

*Japan's Total Empire :
Manchuria and the Culture of
Wartime Imperialism.*

Berkeley: University of California Press,
1998, xiii + 478 pp.

マーク・カプリオ (Mark Caprio)

I

これまでアメリカにおける帝国主義研究は、主に政治や経済の分野を中心に行われていたが、本書 [日本の総力帝国：満州と戦時中帝国の文化] では、新しいトレンドに沿った研究が展開されている。このトレンドとは、政治や経済面に限定せず、民衆レベルでの研究を含め社会や文化的な面も考察し、旧来の研究に比べ、より総合的な検証を行おうという試みである。本書を含め、このような新しいトレンドの形成には、ベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson) の *Imagined Communities* [想像の共同体] の影響を垣間見ることができる。アンダーソンは、コミュニティとは何よりも想像された産物であると説いている。つまり、国民という概念は、実際に存在する以前に政府や社会によって想像されたものであるというのである^(註1)。

帝国主義研究における新しいトレンドには、総督府や本国政府の研究にとどまらず、旧来の帝国主義研究にはなかった植民地の民衆が語る日常生活や個人的ストーリーも内容に含まれている。例えば、朝鮮併合前の韓国・日本関係史をあつかったピーター・ドゥース (Peter Duus) の *The Abacus and the Sword* [算盤と刀]、大英帝国の南アジア帝国を研究したクマリ・ジャヤワルデナ (Kumari Jayawardena) の *The White Women's Other Burden* [白人女性の

もうひとつの重荷]、そして竹中信子の『植民地台湾の日本女性生活史』^(註2) などがある。日本国家の発展に関してはキャロル・グルック (Carol Gluck) の *Japan's Modern Myths* [日本の近代神話]^(註3) があり、このジャンルで本書に影響を与えたと思われる。

本書は、日本人が軍事、経済、農業の面から「『満州国』は日本帝国の『宝石』」というイメージを作り上げたとし、そのイメージ形成の過程を調査、研究したものである。本書のユニークな点は、植民地ではなく内地に在住している一般民衆のいづく「満州国」のイメージを検証したところにある。イメージは文化的な手段 (新聞、雑誌、ラジオ等) から得られており、現実よりも素晴らしい「満州国」のイメージで、満州に渡った日本の兵士や農民の生活をよりロマンチックなものに仕立て上げた。

また、ここでは「総力帝国」(total empire) と著者が名付けた帝国の意義が論じられている。帝国は植民地だけの現象に限定されず、内地も動員して維持される。植民地への国民の支持、あるいは国民の参加を得ることが重要課題であり、その支持や参加を得るための手段としてマスメディアや地方エリート、有力者の役割は不可欠であったと著者は強調する。ここにはマイケル・バーンハート (Michael Barnhart) の *Japan Prepares for Total War* [日本の総力戦争への準備] の影響が見受けられる^(註4)。著者は、バーンハートがいう総力戦争と同じく、「総力帝国が内地で作られ、国内社会、軍事、政治、経済、文化などの多数次元において多くの民衆の動員を果たした」と述べている。

著者はまた、日本帝国の周辺の一部であった「満州国」が、1931年を転換期としてそれ以後、帝国の「宝石」へと変わっていったと述べている。著者の研究はこの過程を完全に把握するため、軍事征服・経済発展および大規模移住を、総合的に、政府レベルから民衆レベルに至るまで検証したものである。

本書は次のように構成されている。

第1部 総力帝国の建設

第1章 満州国と日本

第2章 王冠に宝石——満州国の国際的文脈

第2部 満州事変と新軍事帝国, 1931~33

- 第3章 戦争熱——帝国神道とマスメディア
 第4章 ゴー・ファスト帝国主義——エリート
 政治と大衆動員
 第3部 植民地発展と満州の実験, 1932~41
 第5章 不安定なパートナーシップ——植民地
 経済における軍人と資本家
 第6章 すばらしい新帝国——ユートピア観と
 知識人
 第4部 新社会帝国と植民プログラム, 1932~45
 第7章 土地均分主義の再発明——農村危機,
 そして帝国と農業の結婚
 第8章 移住システム——満州植民地化と国家
 の成長
 第9章 帝国の被害者
 第5部 結語
 第10章 総力帝国の逆説

II

ここではまず、本書の内容を簡単に紹介しておく。
 第1部の2つの章は序にあたる。

第1章では2つのポイントをあげて研究の意義をレビューする。ひとつはエージェンシーの問題、つまり帝国建設の責任問題である。政治や経済中心の研究では国家を責任者とする考えが一般的であったが、著者は国家と社会とが相互に影響を与えた点で両者とも責任者とすべきではないかと述べている。帝国建設の過程はトップ・ダウンのプロセスだけではなく、ボトム（民衆や社会）もトップ（政府や国家）の方向づけに影響を及ぼしたと見ている。

2番目のポイントは、このような両面通行で建設された日本帝国は、トータル（総力）という特徴を有するという点である。「満州」の植民地としての空間的な存在は、渡満した日本人に限らず内地に残っていた人々の日常生活の中にもあり、満州の与えた内地での衝撃の大きさを強調している。

第2章では、日露戦争以後の日満関係史について簡単な説明がなされる。ロシアとの戦争の後に満州は日本帝国の領地に吸収され、1910~30年代までは朝鮮のバッファーとされていた。1931年の満州事変

では、大英帝国にとっての植民地インドと同じように、日本帝国の「宝石」に格上げされた。満州のこの格上げについて、著者は主に中国のナショナリズムの進歩とこれが日本に及ぼす経済的脅威を理由としてあげているが、この説は従来の満州研究者の意見と変わらない。中国の軍閥 (warlords) との関係が悪化して軍事的脅威が高まった途端に、「傀儡国家管理、指令経済、国家管理移住」という3つの植民地政策が実験的な形で登場し、帝国主義の発展を促したという。

第2部は満州事変以後に起こった中国軍との紛争の時期、1931~33年を中心に据え、「戦争熱」と「ゴー・ファスト (go-fast) 帝国主義」の2つの章で構成する。

第3章では、満州での紛争に参加した兵士を誇張して内地に伝聞した件に関して論じている。著者は日本の1930年代の「暗い谷」のイメージに疑問を持つ。この時代の日本国民は国の軍事政策を渋々受け入れ望まない戦争状態に仕方なく引きずり込まれたのではなく、日本のメディアの指揮で全国的に主戦論スピリットが生まれ、中国との戦いを積極的に支持したのではないかと考える。新聞や映画産業は満州のこのロマンチックなイメージを戦場からのニュース、戦争映画、小説等にして脚色し、さらに増幅させて日本国民に焼き付けた。

1930年代の戦争熱は、日本では決して新しいものではなく、日清戦争と日露戦争中にも似た現象が起きている。ただし満州事変の前後に沸き上がった戦争熱のスケールは、前者に比べ大きかった。著者によると、このスケールの違いはメディアの発展にその原因があると述べている。

第4章「ゴー・ファスト帝国主義」は、なぜ「満州国」が1931年から日本帝国の「宝石」、つまり日本帝国の最も貴重な領地になったかを論じている。なぜ、1920年代のゴー・スロー (go-slow) 帝国主義が30年代になって急にペースを速めなければならなかったか。主な日本近代史学者は、政治的、経済的な理由から、日本の列強における地位が保証されるためには大陸への拡張と満州での統制は不可欠であったとするが、著者は、社会的な影響も考慮しなけ

ればこのシナリオは不完全であると批判する。軍事的勝利と民衆の軍部支持は平行に進行し、帝国主義のペースは急ピッチとなった。この民衆による軍部支持は自発的ではなく、民衆を動員するために意識的に作られ、一方で企業・地主・知識人あるいは軍人等の私利と結びつくというプロセスの中から現れたと見ている。

この帝国主義のプロセスから生み出された結果のひとつが第5章のテーマで、軍隊と資本主義の共存共栄的な関係が述べられている。「満州国」の建設計画は、軍事レベルにおいては軍隊の自給自足を、資本主義レベルにおいては内地との自由貿易を、ともにすすめるものであった。両者の共通点は、満州の発展を熱望したことである。資本主義には軍隊による保護、軍隊には資本主義の経営知識という、相互に補完し合うニーズがあり、お互いに不可欠な存在であった。しかし、軍人と資本家が理想としていた「満州国」の発展は最後まで実現せず、満州で生産された商品は、その品質ゆえにアメリカからの商品に取って代わることができず、また、満州は日本との自由貿易の計画も挫折して、日本で生産された商品のほんのわずかしか受け取ることができなかった。著者によると、日本人の満州への夢は破れ、最終的には帝国を拡張しすぎたという結論に至る。

第6章では満州国の「ユートピア」イメージの形成過程を分析している。「満州国」のイメージは知識人が自ら描いた「素晴らしい新世界」をもとに作り上げたもので、この新しい領土はインテリ（主に左翼系）が内地で実現できなかったモデル社会の実験場として、取り扱われた。ここで著者が指摘した重要なポイントは、反軍国主義で、中国人のナショナリズムを理解する立場で満州に渡った知識人は、彼らの新世界を立ち上げた頃には逆に軍部の反中国人ナショナリズムの活動を支持する立場に変わってしまった点である。結局、「満州国」というユートピアの建設は中国人差別・日本人歓迎的な意識の延長上に構想されたものであったことを顕わにした。

第7章と第8章は、社会帝国主義と日本の農民移住プログラムを中心に、「満州国」へ移住した30万人の農民について述べている。著者は日本の農民移

住プログラムをシュペーター (J. A. Schupeter) が述べた「社会帝国主義」の例のひとつとして扱う。すなわち、植民地建設は政治家が社会安定と政治の民衆支持を得るために使うひとつの政策的手段であるという説であるが、都会移住者を利用して植民地を作るというシュペーターの論理は、当時の日本の状況にはあてはまらない。満州へ移住する日本人は地方を中心に選ばれた。これは1930年代のイタリア、19世紀のロシアとも似ており、結果的にはこの問題は国内状況によって左右されたということである。

第7章では日本で行われた移住キャンペーンを説明している。村の有力者やエリートの協力で移住者募集が行われ、「満州国」では牧歌的な日本風の農村が待っていると宣伝してユートピアのイメージを抱かせ、貧しい日本の農民を誘惑した。著者は個々の移住者の出自と渡満した事情を簡単に分析し、内地の社会や経済が解決できなかった自給自足、自助と協同主義は、「満州国」でも同様に解決されないまま、農民に不幸な結果をもたらしたと結んでいる。

第8章は「移住システム」で、移住者の募集に焦点を絞っている。1936年に広田内閣が移住政策を始めたが、この政策をうまく稼働させるために巨大な移住システムが生み出されていった。これが大規模な渡満のための計画、募集を行い、さらに金融、移動手段、住宅供給等、移住者の基本的ニーズを満たした。地方の有力者やエリートの努力でこの移住システムは首尾よく軌道に乗った。彼ら村の裕福なメンバーは、村の貧乏な農民を募集し、熱心に説得し、時には賄賂やいじめの手段までも駆使して、地元から新植民地へ何十万という農民を送り込んだ。ここでは国家建設と帝国建設がセットで行われ、社会福祉の点から見れば、貧しい農民や労働者の不完全雇用は移住によって解決し、中央と地方の連携も実現して、前者が成し得なかった政策を後者が成功させた例もあったとしている。

第9章では、この移住者たちが「帝国の犠牲者」であったと著者は述べている。彼らには一連のプロセスの最初から最後まで自分の意見を表明するチャンスはなく、個人的事情と運命によって、黙って日本から遠い「満州国」へ移り住んだ。アジア大陸で

待っていたのはいわゆる「楽園」ではなく、実際はただの夢物語であったと初めて知る。満州での彼らは、本国政府と植民地統治者に利用され搾取されると同時に、中国人を土地から追い出したり原地住民を搾取する側にもまわった。渡満した新移民は、社会の最低レベルからいきなり高いレベルへ昇進した。しかし地位は上がっても、彼らは軍部と官僚、資産家にとっては、所詮植民地社会の青写真のために用意された駒にすぎなかった。この青写真の重大な欠陥は自給自足の原理にあり、移住した日本人は内地での狭い土地で仕事するには慣れてしたが、政府に貰った土地は広すぎて手が足りず、中国人による小作が不可欠であった。

最後に著者は第10章で本書の結論を述べている。1931年の満州植民地創設から多数の団体が多方面にわたって植民地発展のために関わった。それぞれの団体は満州についてさまざまなイメージを持ち、各々の目的や計画をもって関わる。満州という植民地は、これら数多くの影響を受けたひとつの存在である。この多様性の統一体には長所と短所を同時に観察できるというのが、「満州国」の逆説である。多くの日本人にとって満州国は実際に体験したものではなく、想像したものにすぎない。このイメージはまず日本の政府、そしてメディアによって作られ、次々に軍事的な「英雄」を生み出してきた国内社会の統治の延長にあった。このイメージ作りの監督は中央政府から地方エリートまでを含み、サポーティングキャストは軍人、資産家、農民と日本在住の一般民衆であった。満州というピクチャーを完璧に理解するためには、植民地を全体でとらえ、さらに日本の社会情勢をも検討する必要があると結んでいる。

III

本書の特に注目に値すべき点は、著者が植民地史の全体像を検討したところにある。政治や経済面の大切さはもちろんあるが、これからの植民地研究は社会面を無視して行うことは不可能であろう。英語圏での日本植民地の研究は、ヨーロッパ植民地史の研究に比べて非常に少なく、「満州国」の研究は朝

鮮や台湾の研究と比較するとますます数少ない。本書はそのギャップを埋めるために大きく寄与している。

また、著者が利用した参考文献の多様性から、本書の内容の充実を推し量ることも容易である。しかし、このリストに『朝鮮及び満州』という植民地時代以前の満州の雑誌と、カーター・エッカート(Carter Eckert)の *Offspring of Empire* [帝国の所産]^(注5)が含まれていないのは残念である。前者は満州が植民地化される以前の歴史にとって重要な文献であり、後者は日本の植民地史と満州と朝鮮の相互関係を知るためには不可欠の一冊である。

以下、本書に関する疑問点を上げてみた。

1点目は満州と朝鮮の関係についてだが、著者は1930年代までは朝鮮が日本の「宝石」であったが、満州事変以降その地位は満州国に移り、新植民地は日本の「生命線」になったと述べている。この説は一面で正しいと思うが、満州の植民地化によって朝鮮の姿が消え去ったわけでは決してなく、むしろ1930年以前より重要になったと言える。特に「満州国」と満州に移住した日本人にとって満州が日本の生命線ならば、その「線」が朝鮮半島で切れてしまったら、満州の存在だけでなく、日本自体の存在も危ぶまれる状態になっていたからである。また、満州在住の朝鮮人、あるいは朝鮮から入っていった日本人も多かったので、本書のメインテーマではないにしても、朝鮮と満州の関係を読者に紹介する必要があったのではないかと思う。

2点目は中国人と満州人の存在の問題であるが、本書にはこの両民族の姿はほとんど登場しない。著者は、この研究が日本国内の満州という植民地のイメージ作りを軸にしていると明言しているが、内地を捨てて植民地へ移住した人々と原地住民との交流は必然的に生まれたはずで、単に「舞台裏にいた特徴のない民族」(p. 419)で簡単に片付けられないし、研究の中心ではなくても原地住民の立場を完全に無視することはできないと思われる。

最後に著者の「トータル」(総力)の用語に関して一言コメントを述べたい。著者が「総力帝国」を「総力戦争」と同等であると見なす点についてであ

る。本書は総合的な植民地研究として大変優れたものであり、「満州国」の研究に大きく貢献した一冊であるが、この点は再考が必要かと思われる。これは私個人の危惧に過ぎないかも知れないが、バーンハートの *Japan Prepares for Total War* では、日本の将校は、将来戦争状態になった時、あるいは戦争の脅威がある時、軍隊や武器だけではなく「国家の全ての資源、技術者から医者に至るまで、さらに木綿布から鉄鉱石に至るまで、全てを動員して戦うとしている。このような動員がなければ、最も強大な軍隊でも停止状態になる」^(注6)としている。ここで「総力戦争」は、戦争のための準備を軍事目的以外の施設、学校、病院、工場等でも行うというように、非常に強い意味合いで使用している。著者の表現による「総力帝国」と同等のレベルで使用されていないと思う。にもかかわらず同じ「総力」という言葉を使用していることは、誤解を招きやすい。

この3つの疑問点は私の個人的な興味によるものにすぎない。本書がそのボリュームの大きさにもかかわらず、非常に読みやすい有益な一冊であることには、全く影響はない。

(注1) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: Verso, 1983, 1991). 邦訳: ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』白石隆・白石さやか訳 リブロポート 1987年。

(注2) Peter Duus, *The Abacus and the Sword: The Japanese Penetration of Korea, 1895-1910* (Berkeley: University of California Press, 1995). 特に第2部/Kumari Jayawardena, *The White Woman's Other Burden: Western Women and South Asia During British Rule* (New York: Routledge, 1995)/竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史』(田畑書店 1995年)。

(注3) Carol Gluck, *Japan's Modern Myths: Ideology in the Late Meiji Period* (Princeton: Princeton University Press, 1985).

(注4) Michael Barnhart, *Japan Prepares for Total War: The Search for Economic Security, 1919-1941* (Ithaca: Cornell University Press, 1987), p. 13.

(注5) Carter Eckert, *Offspring of Empire: The Koch'ang Kims and the Colonial Origins of Korean Capitalism, 1876-1945* (Seattle: University of Washington Press, 1991).

(注6) Barnhart, *Japan Prepares for...*, p.18.

(立教大学法学部助教授)